

マタイによる福音書 3:13~17

おはようございます。今日もご一緒に御言葉に聞いて参りたいと思いますが、その前に、皆さんに一つお尋ねしたいことがあります。それは、主にある交わりについて皆さんはどのようなイメージをお持ちであるのかということです。私が求道中のことでしたが、教会の人から求道者と呼ばれ、正直、戸惑ったということがありました。それは、私たちが求道と呼んでいるこの言葉は仏教用語で、本来は「ぐどう」と読むべきものだからです。そして、そうした戸惑いは、それに限ったことではなく、他にもいくつもありました。ところが、その私が、教会で三十年以上を過ごす中で、昔、違和感を感じた言葉を今ではそのまま同じように使うようになっていくわけですね。そして、そうなったのには一つのはっきりとした理由がありました。それは、皆さんと同じように教会に長くいたということです。それゆえ、先ほど申しました、主にある交わりとは何ですか、というこの質問の答えは、この長くいるところから出てくるものであり、それゆえにまた、その私たちの言葉はそのまま私たちの信仰を言い表していると言えるのでしよう。

ですから、それを自分の言葉でしっかり言い表すことはとても大切なことなのですが、ただし、それが大切なのは、自分のためだけではなく、教会の外にある人々にとっても大切なことだからです。かくいう私がかつてそうでありましたが、教会に関心を持ちながらもその外にある人々にとっては、皆さんから直接具体的な何かを聞いてみたいと思っているからです。ですから、そう意味で私たちが発する言葉であり、振る舞いであり、私たちから出てくるすべてのものは、教会的であり、聖書的であり、信仰的であると言えるのです。それは、私たちが長く教会で過ごす中で身につけたものは、あれとこれとにきれいに分けられるものではないからです。しかし、そうである

からこそまた、私たちは、そこに一つの線を引こうとしてしまうわけです。私たちが正しいとか、正しくないとか、あるいは、淨いとか、清くないとか、物事を区別して捉えようとするのは、私たちが信仰が何でもありだとは考えていないからです。ですから、そういう意味で、私たちクリスチャンはとても真面目です。では、その真面目な私たちが、教会について人から問われ、それを自分の言葉で語るとしたら、そこで語られるものはどういうものになるのでしょうか。

これは、数年前に先に御許に召された先輩牧師がよく言っていたことですが、その先輩曰く、教会には二つの種類しかないそうです。一つは「大変な教会」です。そして、もう一つは「うーんと大変な教会」です。大先輩は、この二つだと、事ある度に私にそう語ってくれたのですが、けれども、そう繰り返し語ったのは、主の教会への敬意、リスペクトをなくしていたからではありません。むしろ、その反対です。主の教会へのリスペクトと信頼は、どんな牧師にも負けないくらい強いものがありました。ですから、私もそういう姿勢から多くを学ばせていただいたのですが、ただ、その大先輩のすごいところは今申し上げたことだけではありません。それは、教会を偶像化しなかったということです。どういうことかと言いますと、教会をこの世のものとしてしっかりと受け止めていたということです。つまり、神棚に祭り上げるのではなく、世俗の中に置かれているものであることをしっかりと認識し、それゆえ、物事の判断については、気持ちに流されるかのような分け方をしなかったということです。ただ、もちろん、人間でありますからそこには破れもあり、言ったようにはきれいには行かない、矛盾した姿を見ることもありました。けれども、その語った言葉はやはり真実であったように思うのです。なぜなら、私たちがどう思い、どう考えようとも、教会

の主〈あるじ〉が主イエス・キリストであることは間違いのないわけですから、それがお気楽なものであるはずもなく、それゆえ、私たちが苦しまずに終わるはずもないからです。ですから、その大先輩の「大変な教会」と「うーんと大変な教会」という言葉には、揺らぎつつも自分の見方だけであれかこれかを区別しない、まさに聖書的であり、教会的であり、信仰的である、クリスチャンの姿勢そのものが現されていたと、私はそう思うのです。

それゆえ、聖書が、そういう私たちの交わりをコイノニアと呼ぶのは肯けます。それは、コイノニアという言葉がケガレを意味する言葉から派生したように、主にある交わりにおいては、汚れた部分は排除されてはいないからです。ただし、主にある交わりの特徴は、この汚れたところに強調点が置かれているわけではありません。罪深く汚れた私たちが招き、そこに交わりを築かれたのがイエス様であり、つまりは、私たちの特徴はこの点にあるということです。ですから、私たちがイエス様と神様に感謝を言い表すことができるのは、この神様の赦しを現実味をもって受け止めているからでもあります。そして、この感謝が一時の気持ちの高ぶりで終わらないのは、私たちが交わりの中にあるこの負の部分、つまり、私たち自身の汚れた一面を、私たちが誤魔化さずしっかりと見つめているからです。それゆえ、この感謝とそれに伴う喜びが教会を特徴づけていると言えるのですが、それは、教会という交わりには、人に負い目を負わせたり、また、自分が負い目を負ったりするところではないからです。負い目を負ったり追わせたりするところからは、間違いなく喜びも感謝も出てくることはありません。それゆえ、このことはまた、私たちの次のような態度に結びつくこととなります。それは、私たちが気負わず、てらわず、様々なものについて、然り、然り、否、否と言えるということです。それは、私たちが自らの罪を見つめると同時に、神様の赦しをも自分事として受け止めているからです。そして、それが許されているのは、神様が私たちと共におられるからであり、この共におられる

お方の御心を私たちが日頃から大切にしているからです。

しかし、このことは同時に、私たちがその神様の御心を私たち自身抱え込むものでもあるということです。それゆえ、私たちにとってそれは、正直、有り難いばかりではありません。だから、教会には二つの教会しかないとも言えるのですが、そこで、皆さんに一つお尋ねしたいことは、では、このありがたくないものを抱えることは無駄なことなのでしょうか。それとも、私たちの人生においてまったく役に立たない、ありがた迷惑なだけなのでしょうか。そして、初めにお尋ねした「主の教会、主にある交わりはいどういうものなのでしょうか」という私のこの問いかけですが、それは、まさに、ここにかかってくるものでもあるのです。なぜなら、教会が無駄で、役にも立たないものだと思えば、それなりのイメージしか私たちは持ち得ませんし、またその反対に、そうであってはならない、そうであろうはずもないと思ったとしても、そこから導き出される答えがネガティブな教会のイメージを土台としている限り、それが仮にどんなにポジティブな発想によるものであっても、結局は、コインの裏表に過ぎないものになってしまうからです。しかし、私たちがそう思うのは、それが現実であり、従って、時々耳にする教会に対する全否定は、ある意味、仕方ないことだとも言えるのでしょう。ただ、そこで自分なりのささやかな正義を振りかざすだけでは、私たちの信仰は地に足付かないものになってしまいますし、それゆえ、教会をこの世のものからはかけ離れた、そんな理想像に過ぎないものに置き換えることにもなってしまいます。ですから、それについて聖書は、全否定した上での教会の理想像は金の子牛化するに等しいものだと語るのです。

従って、これは当然のことではあります。私たちが教会を蔑んだり、また理想化したりするところからは、少し距離をおいたところに身を置く必要があるのですが、今日の御言葉は、まさにそのことをイエス様の姿を通して具体的に伝えてくれているわけです。そして、それは、イエス様がただ謙遜な方であり、まただから、この謙遜を学ばなければなら

ないという、それだけのことではありません。もちろん、それを含んでのことではありますが、御言葉が語るころは、結果としての謙遜ではなく、この謙遜を私たちが学び、自分のものとするためのプロセスです。そして、それがここでのイエス様の姿を通し現されているわけですが、洗礼者ヨハネからの洗礼の望むイエス様に対し、それを思い止めようとして、ヨハネが「私こそ、あなたから洗礼を受けるべきなのに、あなたが、私のところへ来られたのですか」と言っているように、そして、そのヨハネに対し、イエス様「今は、止めないで欲しい。正しいことをすべて行うのは、我々にふさわしいことです」と仰っているように、そこから分かることは、正しく、ふさわしいことを日々私たちが実行しなければならぬということでもあるのでしよう。それゆえ、イエス様がここで「我々」と仰っているように、神様が私たちに求めるすべてのことを、私たちがイエス様と同じように理屈抜きに行うなら、私たちはイエス様のように謙遜を身につけることにもなるのでしよう。

ただし、そのためには、私たちは自分の気持ちや考えなどを基準に物事を区別するのではなく、ひたすら御心に委ね、御心に適った形でそれを形に表さなければなりません。そして、そのために求められることは、共にある神様の御心を見失わないということでもあります。そのためには、自分がどこに置かれ、どこに生きるものであるのかをイエス様と同じようにしっかりと見つめていなければなりません。そして、イエス様と同じように洗礼を受けた私たちにはそれが分かっているということでもあります。このことはつまり、ここでイエス様が「我々」と仰るように、そういう意味で洗礼を受けた私たちはイエス様とまったく同じであるということです。ただし、だから、私たちがイエス様とそのまますべてが同じであるということではありません。イエス様は神様の独り子である以上、私たちと同じであろうはずもありません。けれども、その私たちがイエス様に「我々」と呼んでいただいているわけですから、同じところに生きているのは間違いのないのです。ところが、その私

たちがこの有り難い事実を受け入れようとしなないのはどうしてなのでしょう。

皆さんは、御言葉が御心として私たちに求めることを、受け入れられない、受け入れたくない、そんなふうに考えたりすることはないのでしょうか。それは、イエスが高貴なお方であるだけでなく、とても清らかなお方であるからです。そして、それは、事実、その通りであり、だから、ヨハネもイエス様の洗礼の申し出を「とんでもない」と言って断ったわけです。ところが、このヨハネの発言を受けて、イエス様は怒りもせず、お願いだから、そうさせて欲しいと頼むのです。それは、それが御心であり、それゆえ、正しく、ふさわしいことだからです。イエス様の洗礼が終わるやいなや、「これは私の愛する子、私の心に適うもの」との天よりの声が響き渡ったように、イエス様がヨハネより洗礼を授かったということは、それが独り子を私たちの許に送った神様の目的に適うものであったということです。

そこで、この神様の目的について考えてみたいのですが、ところで、ここでイエス様が「私にふさわしい」とは仰らずに、「我々にふさわしい」と仰っているのはどうしてなのでしょう。それは、人の子として私たちと何から何まで同じ人間として過ごされたのがイエス様であるように、この同じであるというところに、イエス様を私たちの許に送った神様の目的があった、つまり、世俗にまみれた私たちとも共にあることがその目的であるということです。ですから、先週の御言葉の中でヨハネがイエス様について「聖霊と火であなたたちに洗礼をお授けになる」と言っていることは、今日の御言葉と一緒に洗礼というものを考えるなら、もう少しよく分かるように思いません。私たちが洗礼を受けるということはつまり、まさにイエス様がその私たちと同じ地平に共におられ、そこに私たちが生きているということです。それゆえ、私たちにとってイエス様という存在は、神棚の上にまつりあげるものではありません。私たちはそのイエス様と共にあるわけで、しかも、私たちの家族として、また友として生涯を共にしてくださっているわけですから、遠いところに祭りあげることはできないということです。

ですから、そういう意味で、私たちが神様を崇めると言うことは、つまりは、私たちがこうしてイエス様と共に神様を礼拝するということが、誤解を恐れずに申し上げれば、私たちがイエス様と共に神様を担いでいるようなものだということです。そこで、ある牧師先生の言葉を思い出しますが、この方は浅草の出身で三社祭を身近に感じながら育ち、そして、牧師として真宗王国、北陸でとても大きな働きを成した方でもあります。その先生が以前こんなことを仰っておりました。神輿を長い時間担いでいると、どうしても疲れてくる、しかし、神輿を落とすわけにはいかない、神様を地面にたたきつけることになるからです。だからそういうとき、どうするのか、お先棒を担いでいる者が大声で「肩を入れろ」と叫ぶのだそうです。すると、みんな一斉に肩をぐっと入れ直して、再び、威勢良く、わっしょい、わっしょいと声を張り上げることになるのだそうです。ただ、この牧師先生の話でおもしろかったのは次のことです。そういう中でも、必ず一人や二人、それでも肩を入れずに神輿にぶら下がっているだけの者がいるそうです。でも、それで神輿が落ちることがない、神輿を担ぐということはそういうものだと言っていたのですが、その話を聞いて、私は、なるほど教会というものはそういうものかと思わされたのです。

そこで、話を元に戻しますが、イエス様がヨハネから洗礼を受けられたということは、つまりは、神様という神輿のお先棒をイエス様が担いでおられるということです。そして同じように洗礼に与る私たちは、そのイエス様と同じように、神様という神輿を担いでいるということです。それゆえ、ここでの天からの声は、イエス様だけでなく、洗礼を受けた私たち一人ひとりに語りかけられたものでもあるということです。つまり、洗礼を受けた私たちは御心にふさわしいということです。ただし、そのように私たちが理解できるのは、天の声が「これに聞け」と言っているように、私たちがイエス様と同じように御心にふさわしくあろうとするからです。けれども、そのために私たちに求められることは、私たちが正しいとか、清いとか、自分の目で何か

を決めつけることではなく、ただ担ぐことだけです。けれども、それが難しい、洗礼者ヨハネの姿がそのことを現してくれているわけですが、それは、ヨハネが、こうでなければならぬと思込んでいるからです。ですから、この思い込みを打ち砕こうとされたわけですが、それは、打ち砕かれればこそ、このイエス様と同じであるということが実感させられることにもなるからです。そして、そこで打ち砕かれることになるのは、宗教的領域と世俗領域とを区別する見えない壁のようなものでもあります。それが打ち砕かれたということはつまり、私たちにとっての宗教領域と世俗領域との間にはもはや区別がないということです。つまり、一週間丸々すべてが教会生活であるということです。なぜなら、日曜日だけでなく、私たちといつまでもずっと共にあるのが私たちのイエス様であるわけですから、それゆえ、それを知った私たちは自分の理屈を引っ込めて、イエス様にお従いすることになるわけです。

ただ、私たちの理屈からすると、イエス様のなさることは少し分りにくいものでもあります。けれども、イエス様の仰ることは、ここでもそうですが、同じであり、一緒であると言うところから語られているものなのです。そして、私たちは事実、イエス様と一緒にいるわけです。ですから、ここに私たちがしっかりと立っていれば、イエス様の一貫した態度については自ずと知らされることとなります。なぜなら、仮に私たちがもし信仰というものを、聖書というものを、そして、教会というものを、何が何だかよく分からなくなった時には、一貫性を欠いた私たちの言葉からではなく、私たちと同じ地平に生きるイエス様の言葉から、一回一回、聞いていくなれば、イエス様が洗礼を受けたその直後に天からの声が響き渡ったように、理屈は後からついてくるものだからです。ですから、そのためにもイエス様と一緒にいることを心に留めて、イエス様と同じであるがゆえに働く神様の御心をこの世で言い表す者でありたいと思います。祈りましょう。